

日本語と英語の現在の時の副詞の意味と用法

The Meanings and the Uses of the English and the Japanese Present-Time Adverbs

西山 淳子

NISHIYAMA Atsuko

(和歌山大学教育学部)

2022年7月19日受理

Abstract

The English adverb *now* and the Japanese adverb *ima* ('now') refer to utterance time in their deictic uses, indicate reference time in a narrative context, and mark a topic shift or discontinuity at the beginning of an utterance. This paper focuses on their deictic uses, where they seem to differ in their temporal coverage of meaning. The deictic use of *now* does not occur in past-tense sentences, but *ima* does. This paper analyzes their meanings in a unified way to capture both deictic and anaphoric uses of *now* and *ima*.

1. はじめに

英語と日本語の副詞*now*と「今(いま)」は、事象(出来事や状態)を修飾し、その事象が発話時に成立していることを表すことが出来る。次の英文(1)では、*now*で示される発話時にTomが京都に住んでいるという状態事象が、(2)ではTomが本を読んでいるという活動の進行状態が成立している。他方、日本語の例文(3)-(4)でも、副詞「今」に示される発話時間に、ケンが京都に住んでいるという状態事象とケンがケーキを食べているという進行相の事象が成立している。このように発話者の「いま、ここ」を基準とし、発話時間を指す解釈は直示的用法とされ、現在の時の副詞の主要な用法となる。

- (1) Tom lives in Kyoto now.
- (2) Tom is reading a book now.
- (3) ケンは今京都に住んでいる。
- (4) ケンは今ケーキを食べている。

しかし、*now*と「いま」が、直示用法で実際に指し示す時間軸上の時間は必ずしも一致しないように思われる。次の英文(5) a-bでは英語の*now*は、現在時制と共起し、発話時間に成立している状態を修飾しているが、過去時制のbは不自然となり、日本語の(6) a-bの「いま」は、(6a)の現在時制に加えて、(6b)の過去を表す「た」形とも共起し、発話時間だけではなく、発話時の少し前に成立している状態を修飾することができる。

- (5) a. It is hot outside now.
- b. *It was hot outside now.

- (6) a. 外はいま暑い。
- b. 外はいま暑かった。

つまり、英語の*now*は発話時点を指し、日本語の「いま」は発話時点を中心として、少し前の過去を含む幅のある時間を指しているようだ。しかし、これらの違いはあるが、*now*と「いま」は、いずれも話し手と聞き手の「いま、ここ」を基準とする時間軸上の時間を直示しており、少し前の過去を示す例(6b)を含めて、どちらの副詞も直示的な用法(つまり解釈)といえる。本稿では、これらの副詞の解釈に現れる発話時間の幅の違いがどのように生じるかについて考察したい。

なお、現在の時を表す副詞(句)には、英語の*currently*や*at present*、日本語の「現在」「目下」も含まれるが、本稿では、より口語的で、頻繁に使用される*now*と「今(いま)」に限定して考察する。

2. 現在の時の副詞 *now*と「今」の用法

前節で述べたように、英語の*now*は直示的な用法では過去の事象と共起しづらく、それに対し、日本語の「今」は、過去形と頻繁に共起し、「少し前」という意味に解釈される。次の例(7)では、*now*が過去の事象と共起し、不自然な文となっている。例(8)では、*now*は発話時間の事象と発話時から見た未来の事象を修飾する。一方、日本語の例(9)-(10)では、「いま」は、現在・過去・未来のいずれの事象とも共起している。

- (7) #The sun now stood above the hippodrome.
(Altshuler 2016, 2021)
- (8) The sun will now stand/is now standing above

the hippodrome.

- (9) 私は今ケーキを {a. 食べた b. 食べている c. 食べる}。
 (10) 今行きます。

西山(2017)は、英語のnowの3つの用法(直示的用法、照応的用法、談話標識用法)を観察し、意味論・語用論から統一的に分析した。日本語の「今」については、直示的用法と照応的用法が見られるようである。

前節の例(1)-(6)は、nowと「今(いま)」の直示的な用法を示し、次の例(11)-(12)は照応的な用法を示す。さらに(13)の3文目の文頭のnowは談話標識としての用法を示している(Schiffrin 1987)。

- (11) At eight, he'd been determined to find out the truth. Now he asked less, probably because he knew he couldn't wear her down. (COCA) (西山 2017)
 (12) さきほどまではインシュリンの昂奮期で、患者はのたうちまわったり叫んだりしていたのだった。いま彼女はぐったりとなって躰をかいていた。(工藤 1995: 200) (以降、例文中の下線部は本筆者による)
 (13) So I em ... I think, for a woman t'work, is entirely up t'her. If she can handle the situation. Now I could not now: alone. (Schiffrin 1987)

例(11)では、過去形で描写される物語の中で、nowは物語内時間(ここでは前文の状態に後続する時間)を指している。日本語の例(12)も、後述するように、直前に過去形(タ形)で描写される出来事の物語時間を指して「いま」が使われている。例(13)では、1つの文の中に二つのnowが含まれている。1つめの文頭のnowが話題を転換し、2つめの文中(述部)のnowは否定状態が発話時間に成立していることを表すとされる。そのため、一見、文頭のnowは談話機能のみを担うように見える。日本語の「今」については、このような話題転換の談話機能のみを担うような例は見当たらない。だが、上記の照応的用法(12)のように、文頭に「いま」が現れ、描写される事象の時間を表すと同時に、場面転換の機能も合わせ持つ例は散見される。小説の一部である(12)では、「いま」は、「さきほどまでは」で表される時間の出来事の回想場面と対照を成し、回想シーンから物語内の進行中の時間への移行を表していると言える。つまり、下記(14)に見られる「看護師が報告してきた」時間が物語内での現在である。例(14)は、(12)の直前の場面を含めた一節である。同様の例は(15)でも見られる。

- (14) 「^{サブコーマ}準昏睡にはいりました」と看護師が報告してきた。
 さきほどまではインシュリンの昂奮期で、患者はのたうちまわったり叫んだりしていたのだった。いま彼女はぐったりとなって躰をかいていた。(『夜と霧の隅で』)
 (15) 「おい、これは危ないぞ」と江藤は強い声で言った。…
 まだ三時過ぎであったが、吹雪の厚みの下ではほとんどどうす闇のようだった。…この見知らぬ山の奥に、健一郎と登美子と二人だけが閉じ込められていた。いま登美子は緊張し、押し黙って、命がけで滑っていた。…(『青春の蹉跎』)¹⁾

工藤(1995)は、「いま、現在」と共起する過去形の「ていた」は、非過去形「ている」と交換可能であることを指摘している。つまり、(14)や(15)の「ていた」は直示的な過去時制ではなく、相対時制(Comrie 1985、他)となる。いずれも、これらの「いま」は物語内時間を指しており、その時間に事象が成立していることを表現する照応的用法であり、それに加えて、話題の移行の標識としての機能を兼ねている。

西山(2017)は、英語のnowの、談話標識の用法を含めた3つの用法は、Reichenbach(1947)の時制の概念とPartee(1984)の時制の照応性と参照時間の更新という概念を利用し、さらに情報構造に基づく対照主題の概念を使って、統一的に分析可能であることを示した。これらの分析は、(14)や(15)を含めた類似した用法が観察される日本語の「いま」にも有効であるように思われる。しかし、ここで問題となるのは、前述のように、両言語の現在の時の副詞が直示的用法で指す時間が異なっていることである。つまり、直示用法において、英語のnowは過去時制と共起不可能であるのに対し、日本語の「いま」は過去時制と共起可能であり、「少し前」の解釈が得られることが説明できない(例(7)-(9)を参照)。

ロシア語や韓国語では現在の時の副詞は、時間解釈によって異なる語彙が使われる。つまり、物語の文脈で、物語内の先行する参照時間と一致するか、時間を更新するか、或いは、状態事象と共起するか、出来事事象と共起するかによって、異なるnowに相当する副詞を使う(Lee and Choi 2009, Altshuler 2016)。一方、英語のnowはそれら両方に使われる。前述の(9)-(10)に見られるように、日本語の「いま」も、状態事象と出来事事象、どちらとも共起し、両方の用法を持つように思われる。

3. 現在の時の副詞 nowと「今」の意味論

3.1 直示用法と物語過去のnow

上に述べたように、西山(2017)は、Reichenbach (1947)流の時制の概念を利用し、nowの意味は、談話に参照時間の変数(仮に R_{now} とする)を導入し、直示可能な発話時間 S が談話に存在する場合は S を値とし(直示的解釈)、直示可能な発話時間 S が存在しない談話(物語の文脈)では、先行して談話に導入された参照時間 R (物語内の現在)を値とし、それが文の表す事象の時間と一致するとした(照応的解釈)。つまり現在時制と共起する直示的なnowでは、(16)のように R_{now} の値が文の参照時間 R と事象時間 E (Kevinが京都に住んでいる状態の時間)に一致する。

(16) Kevin lives in Kyoto *now*.

$$E=R=S, R_{now}=S$$

(E =事象時間、 R =参照時間、 S =発話時間)

(西山 2017より修正)

さらに物語過去で見られる時制の照応的用法の例(17)は、(18)のように表すことが出来る(西山 2017)。

(17) Ken got up (e_1). He ate breakfast (e_2). He *now* went to school (e_3).

(18) $\tau(e_1) \subseteq r_0, \tau(e_1) \lesssim r_1$

$$\tau(e_2) \subseteq r_1, \tau(e_2) \lesssim r_2$$

$$\tau(e_3) \subseteq R_{now}, R_{now} = ?, R_{now} = r_2, \tau(e_3) \lesssim r_3$$

$$r_0 \lesssim r_1$$

(「 $t_1 \lesssim t_2$ 」は「 $t_1 < t_2 \wedge \neg \exists t_3 (t_1 < t_3 < t_2 \wedge \exists e (e \subseteq t_3))$ 」であり、ここでの e は当該の談話に関わる出来事とする」という意味を表す。)(Partee 1984, Nishiyama 2006)

例(17)は物語過去の一連の連続した出来事(e_1, e_2, e_3)の例である。nowの照応的用法を示すために、出来事(e_3)に現在の副詞nowを付加した。 $\tau(e)$ は事象 e の時間的痕跡(事象 e の生起時間)である。

Partee(1984)の時制の照応性と参照時間の更新の概念を使い、参照時間 r_n の値は、それぞれ出来事が導入されると、その出来事 e のすぐ後の時間で、その二つの間の時間にその談話に関わる出来事に介入されないような時間 r に更新される($\tau(e) \subseteq r$)。次に新たに導入される出来事の時間($\tau(e_2), \tau(e_3)$)は、それぞれ更新された参照時間の値(r_1, r_2)に一致、もしくは含まれ(\subseteq)、時間的に連続していると解釈される。参照時間の更新は談話表示構造を利用すると図1のように表すことが可能である。図1は、例(17)を談話表示構造(Kamp and Reyle 1993)で示したものだ。そして、nowが文頭に現れる場合は、対照主題として機能することにより、参照時間の値は更新され、nowの談話標識

としての効果が得られるとした(西山 2017)。

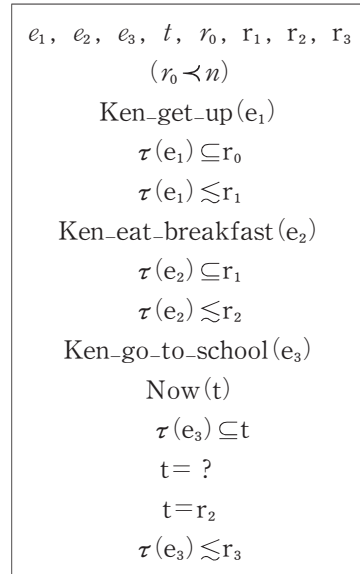


図1：(17)の談話表示構造：参照時間 R の更新とnow
(西山 2017より修正)

この分析では、情報構造を組み合わせることで、談話標識の役割を担うnowの談話効果を時間的な定義から導き出すことが出来た(詳細は西山(2017)を参照)。しかし、前述した二つの問題は解決されていない。まず、この分析では現在時制や物語過去と共起するnowのみを扱っており、例(8)や(10)のような未来時制や未来に起こる事象と共起するnowと日本語の「いま」は扱っていない。二つめに、日本語の「いま」との違いがなぜ起こるのか明らかにされていない。日本語の「いま」は「少し前」という解釈を持ち、過去形と共起するが、英語のnowは直示用法では過去形とは共起しない。

3.2 事象と談話関係から捉える時制とnow

次の例(19)では、未来時制でnowが容認されるが、例(20)では過去時制でnowの共起は不自然な文となる。しかし、(21)のように、過去時制の談話にnowが埋め込まれると、nowは容認される(Altshuler 2016, 2021)。これらのnowの容認性の違いは、nowを純粋な指示詞と捉え、発話時、または物語内現在の時点(または時間幅)を指すと捉えるだけでは説明ができない。例えば、例(19)では、nowで指示される時間が発話時間であるとする、willで表された未来時制の文で記述される未来の事象を修飾することは出来ないはずであるが、(19)は自然な発話と見做される。

(19) The sun will now stand above the hippodrome.
(Altshuler 2016:45)

(20) # The sun now stood above the hippodrome.
(= (7))

(21) Pilate raised his martyred eyes to the prisoner

and saw how high the sun now stood above the hippodrome, how a ray had penetrated the arcade, had crept toward Yeshua's patched sandals and how the man moved aside from the sunlight. (Altshuler 2016:28)

Altshuler (2016)は、次の時制規則(22)とnowの意味(23)を提案し、各変項の値は(24)の想定に従って決められるとする。

(22) 発話時間、事象時間、参照時間(時制規則)

- a. 過去時制の文 Φ が真となる条件は、 Φ によって記述される事象 v と参照時間 t が次の条件を満たさなければならない。
- i. $t \prec$ 発話時間(参照時間 t は発話時間に先行すること)
 - ii. $t \circ \tau(v)$ (参照時間 t は記述事象 v の時間痕跡と重なる)
- b. 現在時制の文 Φ が真となる条件は、 Φ によって記述される事象 v と参照時間 t が次の条件を満たさなければならない。
- i. $t \approx$ 発話時間(参照時間 t は発話時間とほぼ一致する)
 - ii. $t \circ \tau(v)$ (参照時間 t は記述事象 v の時間痕跡と重なる)

(23) 'now'の意味要件

'now'文 Φ が真となる条件は、以下を満たす参照状態 s と参照出来事 e が存在することである： s は e の最終状態であり、 s の時間痕跡は時制で表される参照時間 t と重なる($\tau(s) \circ t$)。

(24) 想定2(参照出来事 e 、状態 s 、時間 t の値の決定)

参照出来事 e と状態 s と時間 t の値は、 Φ と他の談話の分節単位との間に成立する一つ以上の談話関係の時間的意味によって決められる。

(Altshuler 2016 : 38-39、翻訳は筆者による)

これらの(22)-(24)の時制の規則とnowの意味の定義で説明できるのは、(25)のような例となる。

- (25) a. I hit him because he hit me.
b. # I hit him because he now hit me.
(Altshuler 2016 : 28)

例(25a-b)では、becauseで繋がれている二つの事象が、*Explanation*という談話関係を形成している。*Explanation*が成立するとき、(25)の主節部分 α で記述される事象を e_α 、because以下の部分 β で記述される事象を e_β とすると、二つの事象の間の時間関係は(26)の

ようになる。

$$(26) \Phi \text{Explanation}(\alpha, \beta) \Rightarrow (\neg e_\alpha \prec e_\beta) \\ (\text{Asher and Lascarides 2003 : 160})$$

つまり、 e_α (=I hit him)は、 e_β (=he hit me)に時間的に先行しないと解釈されるが、 e_β をnowで修飾すると、nowは先行しないはずの出来事 e_α とその出来事最終状態を要件として e_β が起こる事になる。すると、原因(説明)となる事象が先に起こる解釈となり、不自然な文となる。このようにして、例(25b)の不適切性を説明することができる。

Altshuler (2016)が提案するnowの意味は、物語の談話内の談話関係を前提として、時制や事象との関係を捉えるのには有効である。しかし、1節であげた英語のnowと日本語の「いま」の用法の違いは、直示的な用法における違いであり、前提となる談話関係を取り出すことが難しい。そのため、物語の談話に登場する現在の時の副詞を捉えるAltshulerの意味分析では参照状態 s と参照出来事 e と時間 t の値を決めることができない。

4. 過去時制と「いま」

最後に日本語「いま」が過去時制、つまり「た」形式で直示的に解釈される例を、再度、簡単に検討したい。1節にあげた直示的な用法の例をここに再掲する。

- (6) a. 外はいま暑い。
b. 外はいま暑かった。
(11) 私は今ケーキを {a. 食べた b. 食べている c. 食べる}。
(12) 今行きます。

これらの「今」の解釈を、非過去時制で「現在」「発話時間」という意味を持つ「今(いま)」と、過去時制で「少し前」という意味を持つ「今(いま)」の多義性と捉えるのではなく、ここでは統一的な分析を試みるため、Altshulerの提案するnowの意味の修正を試みる。

(26) 'now'の意味要件(修正版)

'now'文 Φ が真となる条件は、以下を満たす参照状態 s が存在することである：

前提：事象 e が存在する。

状態 s は e の最終状態に相当し、 s の時間痕跡は発話時間か時制で表される参照時間 t と重なる($\tau(s) \circ t$)。

上の定義(26)では、事象 e が存在することは要件ではなく、「前提」とした。これはAltshuler (2016, 2021)が、物語の談話における照応用法のnowに焦点を置いて分析したことに対して、直示的用法のnowを扱うことを

可能にするためである。つまり状態sの始まりとなる出来事eは、談話に導入されている必要はなく、文脈のない談話の初めに現れるnowの容認性を、この修正によって捉えることができる。また、nowは状態事象と共起するが、(27)のように状態の始まりを前提としないような永遠状態(総称表現)とは共起しないことが観察されている。つまり、直示用法であれ、nowは状態の始まりとなる事象を前提としていると捉えることができる。

(27) *Now, whales are fish. (Ismail 2001 : 77)

さて、(26)の定義を日本語の「いま」に当てはめた定義が(28)である。

(28) 「今(いま)」の意味要件

「今(いま)」文Φが真となる条件は、以下を満たす参照状態sが存在することである。

前提：事象eが存在する。

状態sはeの最終状態に相当し、sの時間痕跡は発話時間か時制で表される参照時間tと重なる($\tau(s) \circ t$)。

英語のnowの意味定義(26)と「今(いま)」の意味定義(28)の前提として存在する事象eは、出来事と状態の両方を含む。事象eの最終状態はeに意味的に含意される状態を含むものとする。また日本語の「た」形で表された状態事象は現在までその状態が継続すると解釈される(Nishiyama 2011)。

このようにnowの意味要件を修正することで、直示用法のnowを扱うことが可能になり、さらに、日本語の「今」に応用することができる。日本語に応用した定義は、現在の時の副詞「今」の直示的な用法を、「た」形文に現れる「今」の用法も含めて、捉えることが出来ると考えるが、その詳細の検証については、別に論じることとしたい。

5. 終わりに

本論文では、日本語と英語の現在の時を表す副詞nowと「今」の、直示用法を含めた意味を捉える定義を提案した。これまで行われていたnowの意味分析では、照応的な用法を中心に物語過去に現れるnowの意味分析が行われていた。本稿では、直示用法のnowと、さらに日本語の「今」との比較に焦点を置き、その直示的

な意味を捉えるための意味提案を行なった。但し、直示用法におけるnowと「今」の、過去時制との共起性の違いについては、さらなる語用論的な分析が必要である。それについては別紙で論ずることとする。

謝辞

本研究は、JSPS科研費#20K00665の助成を受けたものである。

注

1) 例文(5)は、工藤(1995)の引用部分に、小説の原文から副詞「いま」に先行する部分を加えている。

引用データ

石川達三『青春の蹉跎』東京：新潮文庫(電子版2013年)
北杜夫『夜と霧の隅で』東京：新潮文庫(電子版2013年)
The Corpus of Contemporary American English(COCA)

参考文献

- Asher, Nicholas and Alex Lascarides. 2003. *Logics of Conversation*. Cambridge University Press.
- Altshuler, Daniel. 2016. *Events, States and Times*. Berlin: De Gruyter.
- Altshuler, Daniel. 2021. Tense and Temporal Adverbs: “I Learned Last Week That There Would Now be an Earthquake.” *The Wiley Blackwell Companion to Semantics*, 3029–3059.
- Comrie, Bernard. 1985. *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ismail, Haythem O. 2001. *Reasoning and Acting in Time*. State University of New York at Buffalo. Ph. D dissertation.
- Kamp, Hans, and Uwe Reyle. 1993. *From Discourse to Logic, Part 1, 2*. Dordrecht: Kluwer Academic Press.
- 工藤真由美 1995 『アスペクト・テンス体系とテキスト』東京：ひつじ書房
- Lee, Eunhee and Jeongmi Choi. 2009. Two *nows* in Korean. *Journal of Semantics* 26, 87–107.
- Nishiyama, Atsuko. 2006. The Semantics and Pragmatics of the Perfect in English and Japanese. State University of New York at Buffalo. Ph. D dissertation.
- Nishiyama, Atsuko. 2011. English and Japanese Stative Expressions in the Past. 日本英語学会 JELS Vol.27, 197–206
- 西山淳子 2017 「英語の現在の時の副詞nowの意味と様々な用法」『和歌山大学教育学部紀要-人文科学』67号, 107–112.
- Partee, Barbara. 1984. Nominal and temporal anaphora. *Linguistics and Philosophy* 7, 243–289.
- Reichenbach, Hans. 1947. *Elements of Symbolic Logic*. New York: Free Press.
- Schiffirin, Deborah. 1987. *Discourse Markers*. New York: Cambridge University Press.